



# 信州大学 経済学部同窓会報

第 4 号

発行 者 信州大学経済学部同窓会  
同窓会事務局 〒390-8621  
長野県松本市旭3-1-1  
信州大学経済学部内  
TEL・FAX 0263-37-2309

平成19年6月27日発行

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp  
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第四号の紙面より

- 新学部長あいさつ 渡邊 裕
- 会長所感 矢口晋司
- 東京同窓会報告 高木保夫
- 連載 ゼミ「今」  
—後輩達のゼミ紹介—  
椎名ゼミ  
都築ゼミ

- 会員のたより  
神長幹雄 (1970年入学)  
粟澤 徹 (1981年入学)  
宮坂 剛 (1984年入学)  
澤柳信也 (1990年入学)  
加藤絵里 (1991年入学)

- 平成19年度総会案内
- 編集後記



## 新学部長あいさつ

吹きすさぶ

逆風に抗して

学部長 渡邊 裕

六月一日から再び経済学部長職に就くことになりました。宜しくお願ひ申し上げます。以前には、平成六年四月から四年間を務めました。この間九年が経ちましたが、大学、ことに国立大学をめぐる基盤・組織や環境は大きく様変わりし、現在は激しい不合理な逆風に晒されていると言つてよい状況にあります。このような状況の下で、老身には如何なものかと逡巡いたしました。同僚諸兄姉のご支援の約束を得て、難題に取組み、学部の将来のために微力を尽くすことにせん、と覚悟いたしました。

行政組織改革(大幅な国家公務員削減)という政治のターゲットとされた平成十六年四月の国立大学法人化から、早くも三年余が経ちました。六年を一期とする中期計画による認証評価という新しい国立大学法人運営・管理システムの下で、毎年1%の運営交付金(従来からの配分予算)が減額され、すなわち教育研究費等の学部運営経費が削減されるなかで、加えて突然の国家公務員定数5%削減や給与削減・成果システム導入に準拠して、効率化「改革」が進められています。

また、今年に入ってから、国際化、競争力強化の名文を立てて、小泉改革の後継安倍改革が強引に進められようとしています。五月に入ってから、経済財政諮問会議、財政制度審議会、規制緩和委員会、教育再生会議、中央教育審議会と揃つて声を合わせて、大学研究費の競争的配分、大学運営経費の効率的配分、低ランク国立大学(76国立大学中、七帝大他若干を除く、大半)の再編統合切り捨てを唱えて、世論づくりを行つていきます。めざすべき「教育研究強化立国」の建て直しどころか、「市場主義」者の弱肉強食のまがい論で国家予算削減、国立大学管理を強行しようとしています。地方国立大学は、営々たる懸命の努力にも拘わらず、存亡の縁に迫り立てられています。これに対して反撃して行くためには、様々な諸力のご支援をお願いいたしたく、とりわけ同窓会のお力をお貸しいただきたいと考えております。

このような状況のなかで、二〇〇八年六月には、信州大学経済学部創設三十周年を迎える運びとなります。慶賀にたえません。第一期生の皆さんは、知命の年代に達しようとしています。この間、経済学部は、入試改革、社会人大学院ポランテニア単位、社会人大学院など、様々な先導的試みに取り組んで参りました。当初は少なから

ずご批判をいただきましたが、これが成果を上げるに從い、各大学や教育機関に普及いたしております。お陰をもちまして、学生諸君の就職実績の高さを誇ることができ、至つております。これも、同窓生諸兄姉のお力添えによることも大きいと感謝しております。三十年の歳月を重ねて、経済学部もひよこから成鳥へと大きく育ち、その力を蓄えることができてきたといえましょう。

そこで、この三十周年の祝賀行事を同窓会の協力を得て盛大に行い、経済学部の力を確認し、先述しました逆風下にあります。これに屈しない次への学部の発展の礎石としたいと考えております。いま、学部で検討しておりますことは、一つは祝賀事業でございます。祝賀式典や三十年誌発行はともかくも、学部活動基金の造成に力を注ぎたいと考えております。これは、学部と地域社会との様々な連携交流活動を行うこと、優れた教員を招き入れ育てること、学術研究書の発刊助成等研究事業を社会に生かすことなど、現在の学部予算をもつては極めて不十分な活動費を確保したいという願いに基づくものです。もう一つは、地域経済・社会政策研究センターを学部にて敷設するという事業でございます。学部教員は優れた個別研究を行つておられる方が少なくありませんが、組織・集団として地域社会から要請される政策研究に容易には対応できていません。また、一般に、研究者仲間です。仕事を

部教員の研究者と大学外の企業・行政機関・団体などからの加わりいたたく研究者とが、協働して地域経済政策・行政政策・社会政策などの具体的に求められる課題について、政策提起・提言などを行うことができる地域研究機関を設置し、学部の特性を生かしてより積極的に地域社会に連携していこうとする試みです。この試み、具体的な地

域政策の提起は、実効があがることになれば、広く国内に普及することになると思います。経済学部の次の三十年に向けて、研究教育・地域連携に新しい質をもたらす学部づくりを是非とも協力を推進し、経済学部の存在感を高めていきたいと念じています。同窓会諸氏のご協力ご支援ご参加を心から求めるものでございます。

## 会長所感

会長 矢口 晋司  
(1978年入学)

木々の鮮やかな緑が目飛び込んでくる、さわやかな季節となつてまいりましたが、信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野でお元気にご活躍のこととご推察申し上げます。

さて、本年も二月三日(土)に文理学部の諸先輩方により毎年開催されている、信州大学東京同窓会へ御招待頂き、高木理事とともに参加してまいりました。

文理学部物理学科の卒業生でいらつしやる名古屋大学大学院丹羽公雄教授による記念講演、小宮山学長と白井信州大学理事による信州大学の現況と将来への取り組みに関する報告が行わ

れた後、出席した一〇〇余名による懇親会が開催されました。懇親会では、全員参加によるビンゴゲームの他、踊るのが大好きな在校生が、学部を超えて組織する「YOSAKOI祭サークル 和(わ)っしょい」のメンバー一六人による、若さあふれる踊りが披露されるなど、限られた時間ではありましたが、和やかな雰囲気の中で出身学部を超えた交流が展開されました。

最後は全員で「信濃の国」を合唱し、前回同様、母校信州大学への熱い思いが伝わる素晴らしい会合となりました。「東京同窓会は、文理同窓生のみならず文理以外の学部同窓生も多数参加する、特色のある同窓会で、学部の壁を超えた親睦と交流が現在に至る過程で図られてきた」と北澤文理学部同窓会長よりお聞きした言葉が再度思い起

こされる会でありました。

残念ながら、経済学部同窓生の参加は、開催告知の方法が不十分であったことも原因となり私も含め九名と少数ではありましたが、それぞれ学部の壁を超えた親睦と交流を図る絶好の機会と感じとつたのではないのでしょうか。この東京同窓会は、毎年二月の第一土曜日に東京都市ヶ谷の「アルカディア市ヶ谷」で開催されることが予定されており、東京近郊にお住まいの経済学部同窓生の皆様方の積極的なご参加をお願いいたします。今から予定に組み込んでおいて頂ければと思います。開催に関する詳細事項は、後日同窓会報に掲載させて頂く予定です。前回も書かせて頂きましたが、経済学部同窓会としても、全国各地での活動を目指し、支部設立などを検討していく必要性が年々高まってきていると感じております。しかしながら、支部活動の目的が明確に定め難い事、ならびに運営の困難さといった事が障害となり、なかなか具体的な案が絞り込めない状況となつております。今後の理事会で、経済学部同窓会の独自の支部活動について検討を重ねて行きたいと考えておりますが、一方で各学部の壁を超えて、信州大学全体としての同窓会支部活動を展開する道を検討していくことも非常に大切な事との考えもあり、その流れに経済学部同

窓会も合流しつつ、同窓会活動の活性化を目指してゆく事も有意義であると思います。今回、東京同窓会に参加させて頂き、この活動はひとつの参考事例になりうるものとの思いを強くした次第です。

いずれにいたしましても、今後理事会などで検討を重ね、今

## 東京同窓会報告

理事 高木 保夫  
(1977年入学)

同窓会員のみなさま、いかがお過ごしでしょうか。

さる二月三日(土)、都内市ヶ谷アルカディアにおいて信州大学東京同窓会が開催されました。この会は、会報第3号でも参加呼びかけをさせていただきましたが、文理学部の先輩各位によつて毎年開催されております。経済学部からも、矢口同窓会長以下一〇名ほどの参加がありました。

まず名古屋大学丹羽公雄教授(理学部OB)が、『タウニュートリノの発見』と題して講演されました。仁科賞も受賞された方で、湯川博士以来の理論物理学について現状と課題をお話し

後の方向性を同窓会総会に提案していきたいと考えております。同窓会員の皆様方のご意見を是非とも寄せ頂きたいと思っております。

今後とも同窓会活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。東京同窓会に参加して感じた事の報告とさせて頂きます。

ただきました。会場からは、次期ノーベル賞の可能性は?といった質問もあり和やかな講演会となりました。

続いて小宮山学長はスピーチで、医学五年生の発言を同窓生に披露されました。「こじかはむずかしいです」「小児科は難しいです」、「コロナブスって何ですか?世界史取っていないんです」というものです。現代学生事情を、笑み溢れる温顔から持ち前のユーモアで語られ、会場が沸きました。大学の基礎教育をになう全学教育機構が、五四名の教官のもと松本に立ち上がったそうです。テレビ松本には、期限付きながら信大チャンネルも開局したそうです。続いて白井汪芳理事から、豊かなコミュニケーション能力を

もつ教養人を育成するために、同窓会のお力をお借りしたいと要請がありました。白井理事は、工学部のカーボンテクノロジー、繊維学部の先進フアイバー工学、山岳地域環境学など信州大学のオンリーワンからパワーポイントで、紹介くださいました。さらにまた、全国で信大の占める位置を、わかりやすく解説していただきました。分野別論分數では全国30位、科学研究費では全国27位。知的クラスター創生事業においては、工学部のナノフアイバーや繊維学部の有機半導体が大臣賞を受けトップクラスであることを話されました。また地域連携として、諏訪清陵高校との全学包括連携によるスパーサイエンススクール、セイコーエプソン、JA長野との企業連携を話されました。

このあと現役の学生さん「和つしよい」の賑やかなアトラクションもあり、懇親が続きました。東京で「信州大学のいま」を、満喫できる東京同窓会でした。

同窓会各位のご参加をお待ちします。



連載



—後輩達のゼミ紹介—

椎名ゼミ

麻相田 香

椎名ゼミでは、主に統計学の基本を勉強しています。ゼミ生で数人のグループを作り、統計学入門書の項目ごとにそれぞれがグループを担当して講義を行って行く形で、今は「因子分析」という変数相互の関係から新しい概念のファクターを導く手法を勉強している最中です。この因子分析は、新しい概念のファクターを導くと同時に、たくさんの変数を数少ないファクター（ここでは因子という）に集約する手法でもあります。例を挙げると、あるメーカーに対

する企業イメージ調査で、「ユニークな製品がある」「宣伝・広告に熱心」「セールスマンの質が良い」「サービスが良い」「伝統がある」「近代的である」……といった項目があったとして、これらの項目を変数として扱い、パソコン上で変数相互の関係を明らかにすると「営業志向」「品質志向」「革新・伝統」というようなたった二つの因子に集約することができるとは。また、それぞれの因子には因子負荷量というものが存在し、この因子負荷量を求めるのが因子分析の最大のテーマとも言えます。因子負荷量を求めるには統計学や

数学の基本的知識が必要となり、簡単に導き出すことはできないのですが、先生に助けてもらっただけでなくゼミ生同士でも教え合いながら計算していくので、理解も深まりとても力になります。入門書に沿って一通り講義された後は、各自で興味のある現実のデータをネット上から探し出し、パソコンを用いて分析します。分析結果で得られた値をただの数値として見るのではなく、何と何の変数が強い関係を示しているか、新しい概念の因子は一体何か、などを予測してあらゆる可能性を考えます。以上のような流れでゼミを行っていますが、



このような分析は他の講義に役立つだけでなく、職種によっても利用する場面は多いのではないかと感じました。

ゼミ合宿は、一昨年、昨年と海外での合宿が続いています。合宿先は、ゼミ生がプレゼンを行い多数決によって決めていきます。ただ行き先を提案するだけでなく、写真などを用いたプレゼンは想像するに十分な情

報があり、より有効な合宿を実現できる手法であると感じ、今年も個性的なプレゼンが行われると思います。また、合宿先が海外の場合だと、出発前に語学勉強をして空港で簡単なテストをしました。空港でのテストは先生が考えて下さったものでしたが、空港まで来て、もしも不合格になったらどうなるのだろうかという感じを漂わせた先生は、とても面白い提案をするなあと改めてゼミ生に感じさせてくれました。そして、昨年行った台北では、できるだけ中国語を使いながら現地の人と話をし、文化に触れることもできて、個人で行く時とは異なる貴重な体験をすることができました。

このように椎名ゼミでは、皆が楽しく会話もできて大学では見せない顔も見せるかもしれない宴会を思い浮かべながら、普段は頭をフル回転させ、簡単に理解するには難しい統計学の勉強をしています。

都築ゼミ

深谷 優  
野澤 真弓

我々都築ゼミでは、政治学について学んでいます。一言で政治学といっても都築ゼミでは身

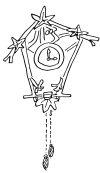
近な選挙から外交のような普段我々が意識しないようなことまで幅広く勉強しています。昨年は安全保障を大きなテーマとして掲げそれについて多く議論をしました。いつものゼミのスタイルはみんなと同じ本の同じ部分を読み、それを一人ないし二人が要約を行い問題提起した後、それについてみんなで議論を行います。しかし本の中には私たちが知らないことが多く書かれています。そこを先生がうまくフォローしてくださり、毎回ゼミでは新たなことを学ぶこともできます。昨年読んだ本の一例としては、田中均外務省元外務審議官とジャーナリストの田原総一郎の対談を取めた「国家と外交」や、現首相である安倍晋三の「美しい国」などを読みました。特に「国家と外交」は今注目されている北朝鮮に関することや外交の生々しい現場などが書かれておりとても印象に残っています。またゼミでは本を読むほかに今、自分たちが関心のあることについて調べてきて発表するというものも行ってきます。これにより受け身の姿勢ではなく自らテーマを探し調べることににより意欲もわき又、それにより次の新たな興味を発見することができとても刺激になりました。



います。昨年のゼミ合宿は、魚が大好きな都築先生のことを考慮して富山県へと行ってきました。ヒスイ海岸でバーベキュー、お酒も大好きな先生なのでビール館で夕飯をとり、そして宇奈月温泉で一泊しました。先生は車内では宇奈月温泉で起こった訴訟についてなど教えてくださり、また堅い話ばかりでなくおいしいシュークリームのお店の話などで盛り上がるなど、とても気さくな方だと改めて思いました。この合宿で最も印象的だったのが「ミラージュランド」という遊園地に行ったことです。周囲は親子連ればかりで、大学

生九人と先生一人という私たちはとても異色なものでした。そんな環境を精一杯楽しむということを為し遂げることができ、とても楽しいゼミ合宿でした。普段のゼミやこういった活動を通じて、先生の人柄にいつも感心しています。それは、先生にとつて私たちは年齢的にも精神的にも幼いものであるのに、しっかりと話を聞いてくれ、きちんと答えてくれるからです。授業ではもちろん、たとえば「何故トロロウどんは一般的でないのか」という質問でさえ、いろいろ発展させ、関東と関西の味の違いまで答えてくれました。こういった

ことまでも答えてくれるので、本当に気さくでこちらからも話しかけやすい先生だと思つています。後半は私からみた先生紹介のようになつてしまいました。以上が私からみた都築ゼミです。



## 同封の名簿調査カードご返送のお願いと個人情報の取り扱いについて

昨年、同窓会報とあわせて、名簿調査カードを同封させていただきます。①名簿記載各項目の掲載可否、③名簿の適切な管理、につきまして、会員の皆様のご意向をお伺いするものでございます。ご返送のない場合には、既刊名簿データの newName簿への転載をご承諾されたものとさせていただきます旨を記しておきましたが、あらためてご確認をいただき、ご返送お願い申し上げます。同窓会名簿は、会員相互の交流・親睦や同窓会活動の基盤となるものであり、またその一環として在学生（入学時に入会手続きおよび会費納入をおこなっている準会員）の就職活動にも利用されることがございます。このことは是非ご理解をくだされまして、できるだけ名簿掲載をお願い申し上げます。

なお、会報・総会等の開催通知をお送りさせていただくため、現住所・帰省先は、必ずお知らせくださいますようお願い申し上げます。

（ご転勤等で現住所が不明の場合、ご実家に会報等をお送りさせていただいております）

平成17年、個人情報保護法が施行されました。これを機会に、同年7月の理事会において、あらためて、個人情報の取り扱いについて、その適切な利用と安全管理のために細心の注意を払うことが決議されました。再度、その内容を掲載させていただきます。

### 1 個人情報の使用目的

総会等の開催通知、名簿への掲載

### 2 名簿の取り扱い

- ①名簿への記載各事項は会員の同意を得る
- ②名簿の配布先は原則として会員に限定する（信州大学の依頼によるもので適切と判断される場合は除く）
- ③会員に、名簿守秘義務があることを周知徹底する

### 3 個人情報の管理

- ①上記使用目的以外に個人情報を使用しない
- ②データベース等の一層の安全管理をはかる
- ③新しく会員になる方には、個人情報の使用について事前の了解を得るとともに、名簿守秘義務の周知徹底をはかる（事務局）

# 会員のたより

## 四〇〇〇メートルに わずかに欠ける富士山

幹事 神長 幹雄  
(1970年入学)

富士山は不思議な山である。その均整のとれた姿といい、他を圧倒する高さといい、富士山は間違いなく日本を代表する山である。だからこそいにしえの時代から、人々は富士山を崇め、畏れてきた。

私にとっても、富士山はやはり特別だったような気がする。小さいころから山といえば富士山だったし、典型的な日本の風景として親しんできた。

山と旅が好きで、大学もアルプスが近い信州大学を選んだ。卒業して入った会社も山と渓谷社という出版社だった。こうして山岳雑誌の編集の仕事についても、富士山はなかなか登山の対象となることはなかった。夏の富士山は観光地の延長のようで、登山の感覚がなかったからだろう。富士登山に興味はわかず、あえて敬遠していたような気がする。

しかし、あることに気がついていた。登山の興味がわいてきた。それは富士山の3776メートルという高さの不思議さで

ある。日本一というだけでなく、4000メートルにわずかに欠けるというその高さゆえの不思議さである。

初めての富士登山は春だったが、その日は雨とガスでなにも見えず、ただ頂上に立つただけだった。しかしそのときから、春の富士はスキーと決めていたような気がする。吉田大沢から一気に頂上をめざし、登頂後、大斜面を一息に滑り降りる爽快感を思った。この計画を実行に移すとき、ある試みを付け加えてみた。それはあらかじめ減圧室(気圧や酸素分圧を低下させて疑似高度をつくる密室)で5000メートルと6000メートルに設定した低圧訓練を行い、高所順応したうえで富士山に直登し、スキー滑降するという「速攻登山」であった。ある年の五月上旬、低圧訓練を受け、その直後、富士山へ向かったが、あいにくの雨で断念、再挑戦は一カ月後の六月上旬となつてしまった。ところが一カ月の延長は、この計画に重大な支障をきたしてしまった。雪が消え、登りづらい鎌尾根を登らざるを得ないうえに、順応の効果も薄れ、「速攻登山」どころではなくなつてしまった。それでも吉田

大沢のスキーだけは充分楽しめた。

冬の富士山は、高度だけでは推し量れないものがある。硬い氷雪でおおわれ、強風と地吹雪で睥睨するそのさまは、なにものを寄せうけない威厳と気品に満ちたものだった。一度荒れると手のつけられない厳しさは、決して日常の風景にはないものだ。それだけに一度は冬の頂に立ちたいと思つていた。ある年の十二月、抜けるような青空のもと頂をめざした。縮まった雪にアイゼンが小気味よい音をたてる。その音はあたりの静けさを物語るものであつたし、一歩一歩確実に登高しているという実感を抱かせるものであつた。風はあいかわらず強く、体感温度はさらに低くなるが、日が西に傾いたころ、日本の最高点に立った。厳しい冬の装いに、時には地吹雪、時には突風と、自然の猛威を振るう冬富士。だからこそ、対峙する私たちも、ともすればくじけそうになる気持ちを奮いたたせ、自然に挑む。そうしてこそ、初めて冬富士はその胸元を開いてくれ、その素晴らしい美しさの一端をかいま見せてくれるのだろう。

夏の富士は最後まで抵抗があつた。あのザクザクの道を列を作りながら登ることなど考えられなかつたからだ。しかし、かりに0メートルから3776メートルの日本最高点に登るな

ら話は別だ。毎年七月二十五日に行われる富士登山競走は、富士吉田市役所前から富士山頂まで直線距離で1キロ、標高差3006メートルを一気に駆け登るといふものだ。午前7時30分、スタート。浅間神社の森のはるか奥に、ほとんど絶望的な高さで富士がそびえていた。ただひたすら登りが続く。五合目で一気に視界が開け、気分的にも明るくなつてきた。早歩きで頂上をめざすが、12時4分、わずか4分のオーバーで完走をのがしてしまった。

登りながらずつと考えていたことがある。それは富士山の3776メートルという高さについてだった。通常は4000メートルを超えると、高山病の症状が顕在化すると言われているところが、この高さは、人間が素手で向き合うのになんと適したものであるか。ヒマラヤのように巨大ではなく、アルプスのように鋭くはない。高度の影響をそれほど受けることもなく、だからといってなめてかかれるほど低くはない。私たちが生身で対峙できるほとんど限界の高さかもしれないのだ。

4000メートルにわずかに欠けるという高さゆえに、富士山は偉大な山なのである。今年もまた、その富士山に夏山シーズンが訪れる。



## ●ご注意下さい!!

最近、本学卒業生宛てに「人事新報社」なる会社から「信州大学同窓名鑑」の発行案内(往復はがき)が送られているとの情報があります。内容は、

- 1 最新個人情報の報告の依頼
- 2 購入申し込みの有無(H19年10月発行予定 価格10,800円)

この会社は、本学および同窓会とは一切関係がありません。個人情報流出の危険性がありますので充分ご注意くださいようお願い致します。

## 山の世界を 科学する

副会長 栗澤 徹  
(1981年入学)

私は現在、北アルプスの山荘経営の仕事に携わっています。ひと昔前の山小屋というのは、「古びた掘つ建て小屋にランプが灯り、山男を地で行く親父が自然の中で頑なに小屋を守って

いる」そういったイメージだったかと思えます。今でもそういうスタイルを維持し、それが魅力の山小屋もありますが、中高年の登山ブームも相まって、多くの登山客が押し寄せる北アルプス南部を中心とする大型の山小屋では、様々な新しい技術を導入した、近代的な経営スタイルを採っているところがたくさん見受けられます。

山小屋というのは、高峰を目指すアルピニスト達の登山を安全かつ容易にするため、あえて人が生活するには困難な厳しい環境に建てられています。このような場所にあつて、社会から隔絶された形で生きていこうとすればそれも可能ですが、社会とともに生きていこうとすれば、インフラの全くない、ある意味で孤立したこの世界では、石油・ガス・電気といったエネルギーや水・食料の確保はもちろん、情報の収集や資産のメンテナンスまで、ありとあらゆることを自力でおこなわなければなりません。そのため、限られたちっぽけな世界で活動するわりには、多面的に社会と接することができるようになります。

例えば、原油価格が高騰すれば、自家発電のために大量に消費している軽油価格の上昇という形ですぐにはね返ってきませんが、雇用状況が改善されれば、バブル崩壊以降、主たる戦力となっていたフリーターの減少に

より、労働力不足が深刻な問題となります。環境問題が叫ばれる昨今では、バイオ技術を駆使した「し尿処理施設」の設置や登山客の残す大量のゴミ処理にも多額の設備投資が求められます。また、団塊の世代が退職する今後数年間は、中高年登山者が多数を占める山の世界では、より積極的にマーケティングをおこない、業績を伸ばすまたとないチャンスとなる、といった具合で、一見世の中とかけ離れた世界に見えながら、実際には様々な分野で社会と密接な関わりを持っています。

そんな中にあつて、ここ数年私が入組んできたことの一つに、「山岳地帯における医療や自然科学の研究をおこない、登山者の安全のために役立てていこう。」というものがあつて、我々山岳関係者は、民間の救助隊に加盟し、遭難事故発生時には警察に協力して救助活動をおこなっているわけですが、山小屋の立地条件を生かして研究活動をおこなうことは、予防的により多くの人を救えるのではな

いか、と考えたためです。私の働く山荘では、東京にある医大の先生方や看護師さん達の御尽力により、夏期に診療所を開設しているのですが、一昨年から、本格的に高地医療の研究を進めようということで、私も測定器具を装着して登山を行なう等、研究活動に協力させて

いただいています。その一方で、私の母校である信州大学がせっかく近くにありながら、他の大学の方々と活動することに、一抹の寂しさも感じていました。ところが、昨年から信州大学において山岳科学総合研究所が本格的に活動を始め、山岳県長野野にある大学として、学部横断的に山岳科学という分野を確立しよう、という取り組みが始まりました。

今のところ、理学部を中心とした活動が主なのですが、気候変動に関する公開講座やシンポジウムが開催され、私も喜び勇んで参加させていただいております。まだ、始動したばかりのこの取り組みが、今後どのように発展していくのかは分かりませんが、将来は我が経済学部においても、観光ビジネスや環境ビジネスといった信州の特異性を生かした研究活動が行なわれるのではと、密かに期待している今日この頃です。

**自分が原稿を書いて  
いいのでしょか**

幹事 宮坂 剛  
(1984年入学)

ケータイに、覚えのない電話番号から着信があつた。市外局番0263から始まっているし、とりあえず出てみると、信大経済学部同窓会事務局

とのこと。実家に連絡したら、母親が出てケータイの番号を教えたそうだ。用件を聞いてみると、同窓会報に一筆、と意外な話。同窓会の幹事を務めた人には、書いてもらっているとのこと。自分って、幹事だったの？ そういえば、そんな話を、人から聞いたような……。いつ、どんな経緯で幹事になったのだろう。本人がよくわかってないうちに……。まあ、それは置いとくとして。

自分じゃなく活躍されている方にお願ひしてほしい等と、必死にお断りを申し上げたが、事務局の方の苦勞を思い、つい受け入れることになってしまった。同窓会報は、発行されていることは知っていたが、ほとんど読んだことがないし、何を書けばいいものか。「何でもいいですよ」と事務局の方は優しく言ってくれるが……。そもそも、自分は大学時代どの様に過ごしたのか。学生時代を思い返してみると、大学へも真面目に行っていたわけではなく、サークル活動したわけでもなく、必死にバイトしたわけでもなく、忘れられないような恋愛をしたわけでもなく……。何してたんだろう俺は、とネガティブな思考の方向に……。少しでもポジティブに思考を転換し、考え直してみた。

**● 同窓会へのご意見やご要望について**

同窓会へのご意見やご要望などございましたら、下記メールアドレス宛にお寄せください。

同窓会事務局 TEL/FAX.0263-37-2309  
Eメール k-doso@shinshu-u.ac.jp

**● 同窓会掲示板のご活用について**

同窓会では、みなさまの情報交換の場として、掲示板を設置しています。是非ご活用ください。

<http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html>



薄っぺらな学生生活でも、ゼミには出席していたのかな。同期の連中とは、年賀状のやり取りを今もしていることだし、唯一の大学へ行っていた証かもしれない。ゼミは、又坂ゼミに在籍。一応、行政法に触れてみた。

当時は何がなんだかわからず、卒論も何を書いていいのかわからず、パニック状態でとりあえず書いた「作文」で卒業させていただきました。

現在、地方公務員という職業に就いていますが、思考回路は成長せず、相変わらず行政法について、何がなんだか状態が続いている。

さて、実は、この原稿を書くことになるのを予測していたかのように、昨年十一月に又坂ゼミの同窓会がありました。

十一月三日、松本市のホテル花月。

当日は、八〇人以上出席したらしい。もちろん自分も出席。若い人が多くて、驚いた。聞けば、今の4年生で24代目くらいになるとか。ちなみに自分たちは4代目。卒業生も二五〇名以上になるそうだ。これを聞けば、若い人が多くて当たり前か。自分たちが、限りなく初期のメンバーになるのだから。こんなこと、全然考えたことなかったけれど。

同窓会では、卒業してからはじめて会った人がいたり、現役の学生と話して、おじさんの自分を感じたり、同業者の人がいて驚いたり、有意義な数時間だった。実際の会話は、子供の話が出たり、仕事の話が出たり、生活感丸出しだったが。

そんな中、又坂先生と奥さんの言葉を会の最後にいただいた。

又坂先生の話の内容は、酔っていたせいかな、ほとんど覚えていない(申し訳ありません)。

奥さんからは、「私と子供は、先生に苦労をかけられた。でも、今日、皆さんを見て、素晴らしい人間を教育してきたことがわかった。苦労を帳消しにした」(同じく酔っていたので、都合よく解釈)と、ありがたい言葉

をいただきました。(このゼミでよかったなあ)、勝手に感動してしまいました。

大した学生生活を送らなかつたこんな人間にも、こんなふう

に感動を与えてくれてありがとうございます。松本市は、今年市制施行一〇〇年とのこと。経済学部も、学問だけでなく、多くの人達にこんな感動を与えてくれる場所として、これからも歴史を重ねて行ってもらいたい。

最後に、いろいろ情報をくれた田丸君に感謝。

## すばらしい日々

理事 澤柳 信也

(1990年入学)

「村にはすぐ帰ってこれるし、田舎の大学のほうが気楽だに。」一九九〇年四月、憧れだった都内の大学への切符があったにもかかわらず、母のこのお気楽な一言で地元

の大学に進学した。住処は四畳半一間、トイレ共同、風呂なしの古下宿。電化製品はラジオだけ。それでもとりあえずは流浪の身から一歩進んだ深い安堵感に浸っていた。ただその安堵感

は全身から完全に気力を抜いてしまっていた。元々何の取柄もなく運動もまるでダメ、楽しい大学生生活のはずがこの先の勉強にもサークル活動も無関心だった。東京の大学に進学した友人には「それじゃ彼女どころか友達もで

き刺された。そんなある日、地元出身のA君に声を掛けられた。流されるままにA君と農業高校出身のK君、細身でいつもGジャンを着ていたS君を加えた四人で

森フェスティバルの準備をすることとなった。リーダー格のA君の行動力は目を瞠るものがあり、実際のところ他の三人はただ煽られるままに進んでいった。彼の先輩の紹介で冷凍の焼き鳥を上田まで買付けに行き、ガス

はA君の知人の燃料屋から調達。女の子が作ってくれたチケツト

を手にも、県の森周辺の住宅地を回り売り捌く。客集めのために近くの〇〇学園から無償無断で野球応援用の赤いメガホンを準備。自然と協力者も集まり始め、

焼き鳥を焼く担当はファミレスバイト歴の長いU君に決まった。

当日は大盛況。あまりの加熱でガスコンロが割れるアクシデントもあり、焼き鳥の上り待ちは一時間以上の大混乱。にもか

かわらずお客さんから苦情の一つも出なかつたのは、学生のお祭りだったからだろうか。すばらしい仲間と理解ある来場者のおかげで大成功を収め、その夜は大宴会となった。どうやって家までたどり着いたのか覚えていないほどに酔った。

時間同じくT君とも知り合った。見た目優男だが、豪快な一面もあり、たいそう面倒見が良かった。よくアルバイトも紹介してもらった。ギャンブル以外は何も

の方がよく知っていて、良かれ悪しかれ影響を受けた。ある日の昼、「おふくろが体調を崩したみたいで」とぼつりと言う

と。これから様子を見に行こうと。入学当初から既に車を持っていた彼は、率先してよく皆を遊びに連れ出して

くれた。実家に帰ると母は本当に驚いた。今でも人付き合いが下手

だと言われているが、その夜母が「いい友達ができたね」とうっすら涙を浮かべて呟いたのをよく覚えている。

都会のキャンパスとは違って

いたのだから、それなりにおしゃれで善良な学生が多かったと思う。知り合った彼らはそれとは異なっていたかもしれない。そんな彼らを頼り、時には互いに怒りを感じながらも、その魅力に惹かれて影響を受けた。A君は一時政治の道を志し、S君は勤務先の大学生との交流が本

となって書籍に並んだ。K君と

T君は体調を崩したと聞いた。U君はどうしたのだろうか。皆無事で元気でいることを祈る。母親同然に接してくれた古下宿のおばさんは一昨年病に倒れ、急逝した。無念でならない。

勉強でも落ちこぼれだったが何とか家庭も持ち、仕事に奔走する毎日。奔放な思い出は少しずつ無意識の日々に埋もれ、記憶を消し去っていく。今この場を借りてお世話になったすべての人々に感謝申し上げたい。

## 夢の山脈

幹事

加藤 絵里

(1991年入学)

「かといり！愛子さまが公園デビューーだ！皇居周辺をくまなく取材だ！」

「今回のレポートは加害者と被害者、両者に配慮しろ！北海道でしっかり取材して来い！」

「パク・ヨンハの独占取材がとれることになった、韓国へ飛べ！」

曜日も時間もおかまいなく携帯電話に入る取材依頼の連絡。

信州大学卒業後、尊敬する信大OG蔵田玲子先輩を追いかけ長野朝日放送に制作部アナウンサーとして入社。入社数日後、報道部で記者として眼孔鋭くテキパキと仕事をこなす信大OB山岸寿美先輩に「いいか、一人

前に仕事ができるようになるまで「信大卒」を口にするな！大学の名を汚すことになるからな！」と叱咤激励を受け、その迫力に体中の毛穴が引き締まった記憶は十二年以上経った今でもかなり鮮明に残っています。(山岸先輩、もうそろそろ「信大卒」って口にしてもいいですか？・笑)

蔵田先輩の背中を見つめ続け長野朝日放送でアナウンサーとして過ごした四年間。

一九九九年に退社し、上京。フリーアナウンサーとして活動を始め、今年で八年目になります。知り合いも、何のアテもなく、山の手線も東京タワーも分らない名古屋生まれの私が、今もこうして周りの方々に支えられアナウンサーという仕事を続けていられるとは・・・人生って素敵ですよ。

長野県から東京に引っ越したものの、「さてさて、仕事ってどうやって探すの？スタートはそんな次元でしたから。色々考えた末、過去の出演番組一覧とプロフィールをシートにしたもの、宣伝写真、自分のナレーションをやきこんだボイスサンプル、CD、この三点セットを百組以上作成し、電話帳に載っているテレビ番組制作会社を上から順に訪ね、自分で「自分という商品」を必死に売り込みました。もちろんほとんど話も聞いてもらえませんが、お手製三

点セットを目の前でゴミ箱に捨てられたこともありました。貯金と靴底だけが減っていく毎日・・・都内を歩き回りへとへとになり帰宅するとナゼか涙が止まらない毎日・・・でした。

しかし「人間動けば何かひらける」もので、そんなセルフ営業を始めて半年くらい経つと、小さな番組ですが出演やナレーション依頼が入り始めたのです。もちろん一つの仕事を請けたら「手ブラ」では帰りません。更なる自己売り込みと、必ず他の制作会社を紹介してもらう！と決意し。そこで手に入れた細かい糸をたぐり、また次の制作

会社の扉をたたき。脈あり、と感じた会社には何度も足を運ぶ切れてしまいうだつた細かい糸を信頼でコーティングされた頑丈な鎖に変えていくのです。自らの手で。

こうしてTBSの夕方の報道番組【ニュースの森】、テレビ朝日の朝の情報番組【スーパーモーニング】など、レギュラーの仕事が決まり文頭のような慌ただしきで、携帯電話を相棒に日本中を駆け巡っています。何事も「上手くいかない時間こそが本当の強さを育ててくれる」のかも知れません。これからもアナウンサーという枠にはとらわ

れず、人として女性として学びたいこと、挑戦してみたいことは多く、まだまだ全速力で走り続けるつもりです。

今でもくじけそうな時には必ず大学時代を共に過ごした彼、はるちゃんと一緒に見た安曇野の山々を思い出します。大小の山々が連なり、美しき南アルプスを形成している。今、私は大小様々な夢を一つ一つ丁寧に叶えています。いつか全てが連なり大きな山脈になる。そんな未来を信じて。

・・・結婚？  
その槍ヶ岳級の山にはまだ当分登れそうもありません(笑)。

## 平成19年度総会案内

経済学部同窓会総会を下記のとおり開催いたします。  
会員の皆様のご出席をお願いいたします。

信州大学経済学部同窓会 会長 矢口晋司

日時 平成19年11月3日(土) 午後3時より

場所 信州大学経済学部 新棟6階 会議室

- 議題
- 1 事業報告および会計報告の承認について
  - 2 予算および事業計画について
  - 3 役員を選出について
  - 4 その他

なお、議題に先立ち、経済学部長より、経済学部および信州大学の現況と展望について、ご講演いただく予定です。

総会後には懇親会を企画しております。(会費制)

総会および懇親会ご出席の方は、事務局までメールまたは電話(火、木の10~15時)でお知らせください。

e-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp

TEL・FAX : 0263-37-2309

## 編集後記

冬真つ白だった乗鞍や常念の雪がとけて、山の青と雪溪の白と木々の緑のコントラストが美しい、鮮やかな初夏が、今年も松本平を訪れている。皆様も学生時代すくなくとも四回は経験された、あの信州の夏である。

来年二〇〇八年には、経済学部創立三〇周年を迎える。創立の一九七八年は、石油危機後の世界不況に対処するため、機関車論によるケインズの内需拡大策がとられていた。一〇年後の八八年も、八五年プラザ合意を受けて、政策協調によるケインズの政策がとられていた。その一〇年後の九八年も、アジア通貨危機と国内銀行危機を受けて、財政構造改革を棚上げし、ケインズの政策がとられた。いずれも公共事業が主役であった。その後一〇年、とくに二〇〇一年に始まる小泉構造改革以降、政策基調が変化した。市場原理重視の自由主義への転換である。公共事業も削減され、いわゆる土建国家システムも解体しつつある。それは地域経済や大学に大きなインパクトを及ぼしている。

信州の夏は変わらない。だが、三〇年の間に政策思想も経済政策も地域経済も大転換した。皆様も、それぞれの職場や地域において、変化を経験されておられるであろう。その経験をふまえて、さまざまなかたちで、今後の経済学部のためにお力を貸していただければと思う。

(事務局)